

## キーワード

概念的スキル・イメージ処理・スキーマ・触知

## 研究概要

視覚障害者の就労が期待される事務職では、概念的スキル（図で考え説明する）が必要となる。しかし養育環境・教育環境における訓練機会は乏しく、既存訓練が無いため当事者単独で解決できない。従って、訓練プログラムの開発が急務である。

教育心理学では、概念図（概念と概念間関係を楕円・線・文章で表示）の作成が知識の保持・伝達（有意味学習）に影響することが実証されている。そこで筆者らは、当事者から半構造化面接で収集した質的データの分析することで躰きポイントを抽出、結果を基に教材と課題を開発し、当事者が実際に使用することで、改良点及び訓練効果を検証してきた。

学会発表（過去3年、筆頭著者のみ）

- ・ 竹下 浩（2021）、視覚障害者の触知による概念的スキル開発：教材開発と効果検証、日本応用教育心理学会第36回研究大会発表論文集
- ・ 竹下 浩（2021）、視覚障害者向けシエマ習得訓練教材の開発、日本質的心理学会第18回大会withソウル プログラム抄録集
- ・ 竹下 浩・丸山智章（2019）、視覚障害者向け概念的スキル訓練ツールの開発：システム・エンジニア職のタスクによる検証、日本応用教育心理学会第34回研究大会発表論文集

## 応用例・用途

心理学的知見に基づいてツールを開発する企業を想定している。重度視覚障害者（例：先天全盲）が、長方形・楕円・矢印のピースを盤上に配置、テキストを音声等で入力することで、PC画面上に図（例：自部門の現状と課題、改善目標の提案）が描かれていく。それを晴眼者の上司にEメールし、晴眼者の同僚を介さずに直接添削してもらえる。視覚障害以外（晴眼者）でも、児童・生徒の発達支援、学生・社会人の遠隔を含む共同学習支援など、ツールとしての活用の幅は広いと考える。

